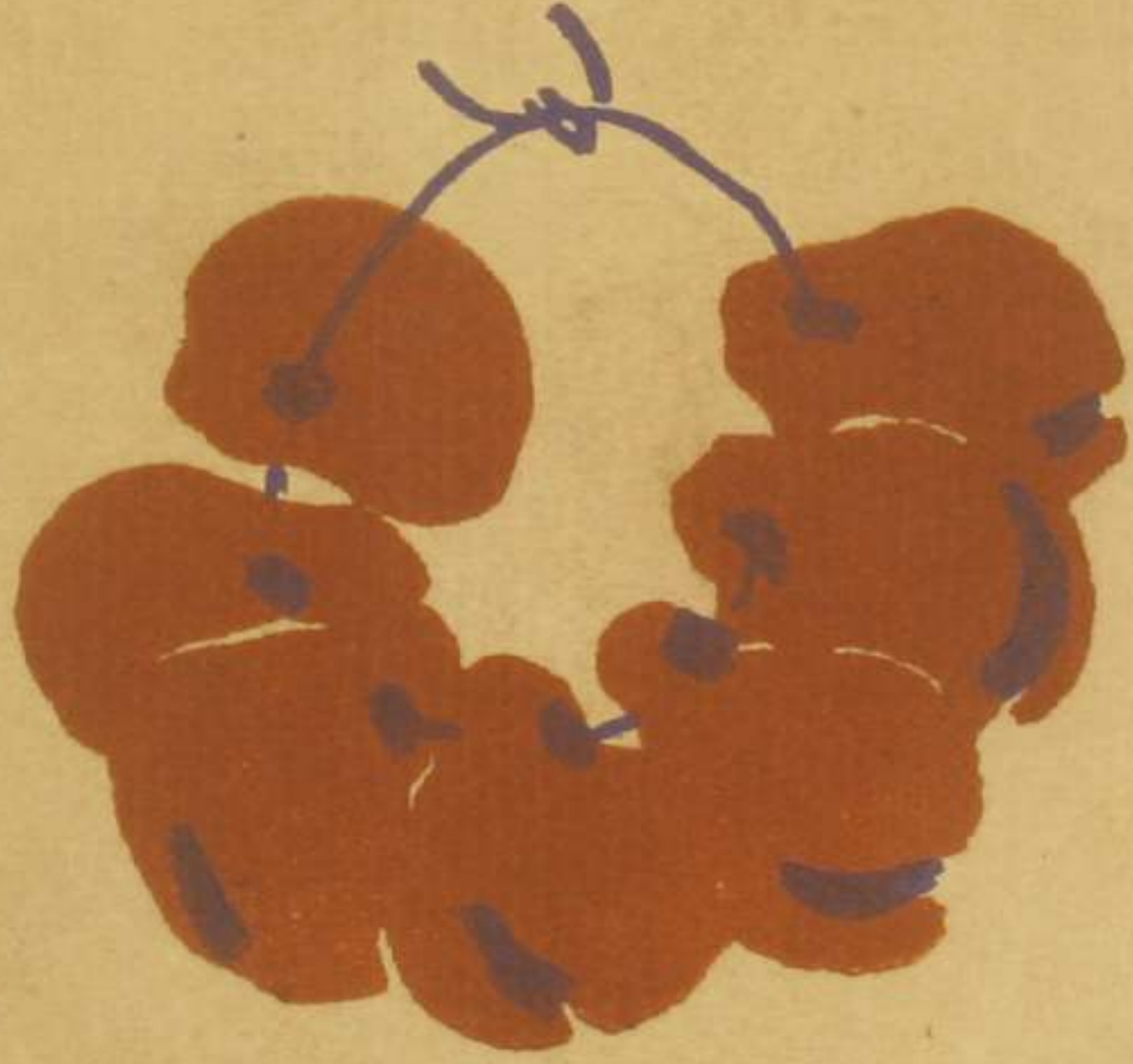


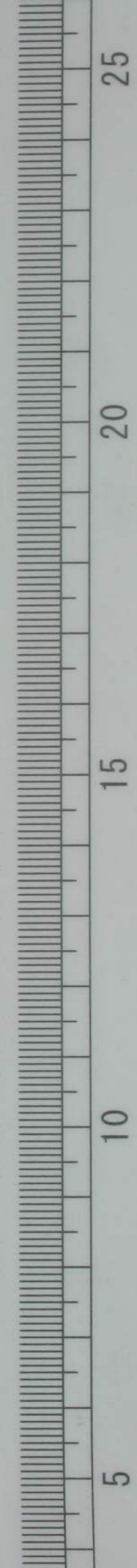
集 歌

光 赤

著 吉 茂 藤 齋



版 出 堂 雲 東 京 東



歌集
赤
光

齋藤茂吉著



集 歌

光 赤

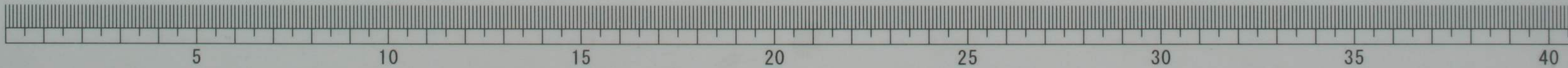
著 吉 茂 藤 齋

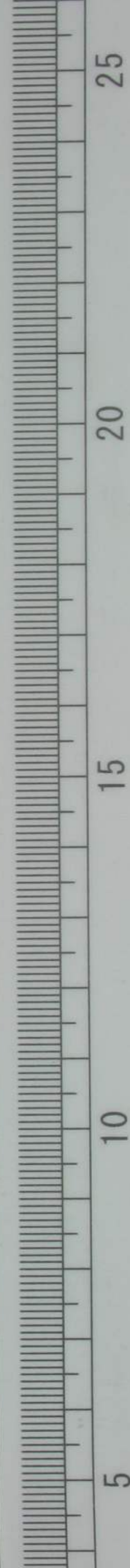


版 出 堂 雲 東 京 東

歌 集
赤
光

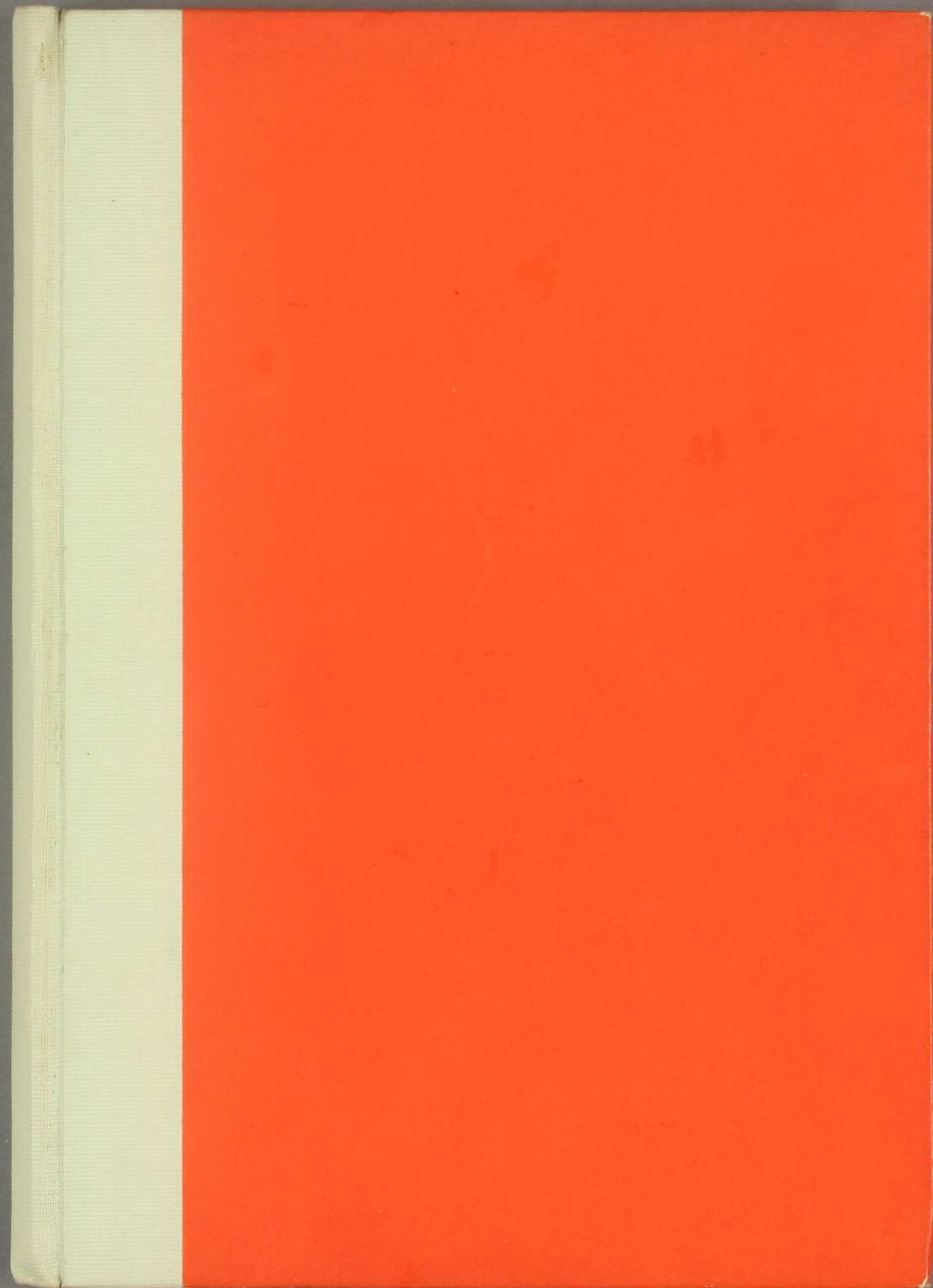
齋 藤 茂 吉 著





歌集
赤
光

齋藤茂吉著





赤

光

明
治
三
十
三
年
五
月
三
日

東京
文
藝
堂
行



川西文庫

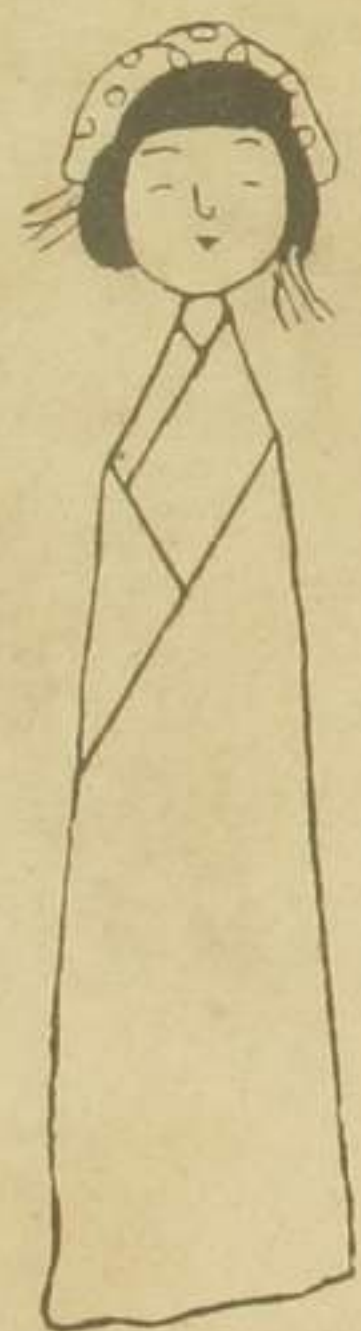
HaWa III 5H4

MCMXIII

赤
光

齋藤茂吉著

東京 東雲堂發行



(アララギ叢書第二編)

川西文庫
No. 115
1931





大正二年

(七月迄)



1 悲報來

ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたる
わが道くらし

ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢を殺す
わが道くらし

すべなきか螢ほたるをころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

氷室ひむろより氷こほりをいだす幾人いくにんはわが走る時ものを
云はざりしかも

氷こほりきるをこの口のたばこの火赤あかかりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ゐぬかなと歎なげかひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦あかひこと赤彦が妻吾めづに寝よと蚤ひらとり粉こなを呉れに
けらすや

罌粟けしはたの向むかうに湖うみの光りたる信濃しなののくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに見んと思へや

あかあかと朝焼けにけりひんがしの山竝の天朝焼けにけり

七月三十日信濃上諏訪に滞在し、一湯浴びて寝よう湯壺に浸つてゐた時、左千夫先生死んだといふ電報を受取つた。予は直ちに高木なる島木赤彦宅へ走る。夜は十二時を過ぎてゐた。

2 屋上の石

あしびきの山の峽をゆくみづのをりをり白くたぎちけるかも

しら玉の愛のをんな戀ひたづね幾やま越えて來りけらしも

鳳仙花城あどに散り散りたまる夕かたまけて
忍び逢ひたれ

天そそる山のまほらに夕よごむ光りのなかに
抱きけるかも

屋上の石は冷めたしみすすかる信濃のくにに
我は來にけり

屋根の上に尻尾動かす鳥來りしばらく居つつ
去りにけるかも

屋根踏みて居ればかなしもすぐ下の店に卵を
數へゐる見ゆ

屋根にゐて微けき憂湧きにけり目したの街の
なりはひの見ゆ (七月作)

3 七月二十三日

めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は
過ぎ行きにけり

夏休日われももらひて十日まり汗をながして
なまけてゐたり

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く
散りゐたりけり

十日なまけけふ来て見れば受持の狂人ひとり
死に行きて居し

鳳仙花かたまりて散るひるさがりつくづくそ
われ歸りけるかも (七月作)

4 麥 奴

しみじみと汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦に
さみだれは降り

雨空あめぞらに煙けむり上りて久しかりこれやこの日の午時
ちかみかも

飯いひかしぐ煙けむりならむと鉛筆の秀ほを研ぎて居かて煙けむり
を見るも

病監の窓の下びに紫陽花あじさいが咲き、折をり風は吹
き行きにけり

ひた赤し煉瓦の扉はひた赤し女刺おんなしし男おとこに物
いひ居れば

監房より今しがた來し囚人はわがまへにゐて
 やや笑めるかも

卷尺を囚人のあたまに當て居りて風吹き來し
 に外面を見たり

ほほけたる囚人の眼のやや光り女を云ふかも
 刺しし女を

相群れてべにがら色の囚人は往きにけるかも
 入り日赤けば

まはりみち畑にのぼればくるぐろと麥奴は棄
 てられにけり

光もて囚人の瞳てらしたりこの囚人を觀ざる
 べからず

けふの日は何も答へず板の上に瞳を落すこの
男はや

紺いろの囚人の群笠かむり草薙るゆるゑに光る
その鎌

監獄に通ひ來しより幾日經し蝸啼きたり二つ
啼きたり

よごれたる門札おきて急ぎたれ八尺入りつ日
ゆるらに紅し

微毒のひそみ流るる血液を彼の男より採りて
持ちたり (七月作)

殺人未遂被告某の精神状態鑑定を命ぜられて某監獄に通
ひ居たる時折にふれて詠みすてたるものなり。

5 みなづき嵐

どんよりと空は曇りて居りたれば二たび空を
 見ざりけるかも

わが體たにうつうつと汗にじみゐて今みな月の
 嵐ふきたれ

わがいのち芝居しばいに似ると云はれたり云ひたる
 をさこ肥りゐるかも

みなづきの嵐のなかに顛たふさひつつ散るぬば玉の
 黒き花みゆ

狂院の煉瓦の角かどを見ゐしかばみなづきの嵐ふ
 きゆきにけり

狂じや一人蚊帳よりいでてまぼしげに覆盆子
 食べたしといひにけらすや

ながながと廊下を來つついそがしき心湧きた
 りわれの心に

蚊帳のなかに蚊が二三疋ゐるらしき此寂しさを
 告げやらましを

ひもじさに百日を経たりこの心よるの女人を
 見るよりも悲し

目を吸ひてくるぐろと咲くダアリヤはわが目
 のもとに散らざりしかも

かなしさは日光のもとダアリヤの紅色ふかく
 くるぐろと咲く

うつうつと濕り重たくひさかたの天低くして
動かざるかも

たたなはる曇りの下を狂人はわらひて行けり
吾を離れて

ダアリヤは黒し笑ひて去りゆける狂人は終りに
かへり見すけり (六月作)

6 死にたまふ母

其の一

ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひ
につつしづ心なけれ

白ふちの垂花ちればしみじみと今はその實の
見えそめしかも

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんと
ぞいそぐなりけれ

うち日さす都の夜に灯はともりあかかりけれ
ばいそぐなりけれ

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額のへ
に汗いでにけり

灯あかき都をいでてゆく姿かりそめ旅とひと
見るらんか

たまゆらに眠りしかなや走りたる汽車ぬちに
して眠りしかなや

吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の
國に汽車入りにけり

朝さむみ桑の木の葉に霜ふれど母にちかづく
 汽車走るなり

沼の上にかぎろふ青き光よりわれの愁うれへの來む
 と云いふかや

上かみの山やまの停車場に下り若わかくしていまは鰈いわし夫をの
 おとうと見たり

其の二

はるばると薬くすりをもちて來こしわれを目守まもりたま
 へりわれは子こなれば

寄り添へる吾を目守まもりて言ひたまふ何かいひ
 たほふわれは子こなれば

長押ながしなる丹にぬりの槍やりに塵ちりは見ゆ母ははの邊への我わがが
朝日あさひには見ゆ

山やまいづる太陽たいやう光くわうを拜まがみたりをだまきの花はな咲さき
つづきたり

死しに近ちかき母ははに添そひ寝ねのしんしんと遠とほ田たのかはづ
天てんに聞きゆる

桑かきの香かほの青あおくただよふ朝あさ明あけに堪たへがたければ
母はは呼よびにけり

死しに近ちかき母ははが目めに寄よりをだまきの花はな咲さきたり
こいひにけるかな

春はるなればひかり流ながれてうらがなし今は野ののべ
に蝻むし子こも生あれしか

死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たり
けるかな

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲し
もよ蠶のねむり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし
乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は
死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死行
くを見たり死ゆくを

ひとり来て蠶のへやに立ちたれば我が寂しさ
は極まりにけり

其の三

檜ひのきわか葉照りひるがへるうつつなに山やま蠶こは青あを
 く生あれぬ山蠶こは

日のひかり斑まだらに漏りてうら悲がなし山蠶こは未いまだ
 小さかりけり

葬はなり道みちすかんのぼの華はなほほけつつ葬はなり道みちべに散
 りにけらすや

おきな草口くちあかく咲く野の道に光ながれて我われ
 ら行きつも

わが母を焼やかねばならぬ火を持てり天あまつ空そらに
 は見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天
のいつくしきかも

火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身のうた歌
ふかなしく

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけむり
のその煙はや

灰のなかに母をひろへり朝日子のぼるがな
かに母をひろへり

落の葉に丁寧ていねいに集めし骨くづもみな骨瓶こつびんに入
れ仕舞しまひけり

うらうらと天てんに雲雀うんせきは啼なきのぼり雪斑ゆきまだららなる
山やまに雲うみゐす

ごくだみも薊あざみの花も焼やけるたり人葬所にふりごの天明あめあ
けぬれば

其の四

かぎろひの春はるなりければ木の芽こゝろみな吹き出いる
山やまべ行きゆくわれよ

ほのかにも通草あひびの花の散ちりぬれば山鳩やまとびのこゑ
現うつつなるかな

山かげに雉子が啼きたり山かげの酸つばき湯
こそかなしかりけれ

酸の湯に身はすつぼりと浸りゐて空にかがや
く光を見たり

ふるさとのわぎへの里にかへり来て白ふぢの
花ひでて食ひけり

山かげに消のこる雪のかなしさに笹かき分け
て急ぐなりけり

笹はらをただかき分けて行きゆけど母を尋ね
んわれならなくに

火の山の麓にいづる酸の温泉に一夜ひたりて
かなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれて
行きにけるはも

はるけくも峽はのやまに燃ゆる火のくれなるど
我が母と悲しき

山腹やまはらに燃ゆる火なれば赤赤とけむりはうごく
かなしかれども

たらの芽を摘みつつ行けり寂しさはわれより
ほかのものとかはしる

寂しさに堪へて分け入る我が目には黒ぐるど
通草の花ちりにけり

見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛夷こぶしの花は
ほのかなるかも

藏王山に斑ら雪かもかがやくと夕さりくれば
岨ゆきにけり

しみじみと雨降りぬたり山のべの土赤くして
あはれなるかも

遠天を流らふ雲にたまきはる命は無しと云へ
ばかなしき

やま峽に日はとつぷりと暮れたれば今は湯の
香の深かりしかも

湯ごころに二夜ねぶりと蕁菜を食へばさらさ
らに悲しみにけれ

山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははそはの母
よははそはの母よ (五月作)

7 おひろ 其の一

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへ赤からなくに

とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬ
ば玉の夜もふけぬる

夜くればさ夜床に寝しかなしかる面わも今は
無しも小床も

ふらふらとたごきも知らず浅草の丹ぬりの堂
にわれは來にけり

あな悲し観音堂に癩者ゐてただひたすらに錢
欲りにけり

浅草に来てうで卵買ひにけりひたさびしくて
わが歸るなる

はつはつに觸れし子なればわが心今は斑らに
嘆きたるなれ

代々木野をひた走りたりさびしさに生きの命
のこのさびしさに

さびしさびしいま西方にくるくるとあかく入
る日もこよなく寂し

紙くづをさ庭に焚けばけむり立つ戀しきひと
ははるかなるかも

ほろほろとのぼるけむりの天にのぼり消え果
つるかに我も消ぬかに

ひさかたの悲天のもとに泣きながらひと戀ひ
にけりいのちも細く

放り投げし風呂敷包ひろひ持ち抱きてゐたり
さびしくてならぬ

ひつたりと抱きて悲しもひとならぬ瘋癲學の
書のかなしも

うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよ
たごき知らねば

つとめなればけふも電車に乘りにけり悲しき
ひとは遙かなるかも

この朝け山椒の香のかよひ来てなげくこころ
に染みとほるなれ

其の二

ほのぼのの目^めを細くして抱^{いだ}かれし子は去りし
より幾夜^{いくよ}か経たる

うれひつつ去^いにし子ゆるゑに藤のはな揺^ゆる光り
さへ悲しきものを

しら玉の憂^{うれひ}のをんな我^{わが}に來^{きた}り流るるがごと今
は去りにし

かなしみの戀^{こひ}にひたりてゐたるとき白ふぢの
花咲き垂りにけり

夕やみに風たちぬればほのぼのと躑躅^{つとじ}の花は
ちりにけるかも

おもひ出は霜ふるたにに流れたるうす雲の如
かなしきかなや

あさぼらけひと目見しゆゑしばだたくろき
まつげをあはれみにけり

わが生れし星を慕ひしくちびるの紅きをんな
をあはれみにけり

しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよ
と言ひて寄りしか

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つつ
くち觸りにけり

たまきはる命ひかりて觸りたれば否とは言ひ
て消ぬがにも寄る

彼のいのち死去ねと云はばなぐさまめ我の心
は云ひがてぬかち

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みづ
のかなしかりけり

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

其の三

愁へつつ去にし子のゆる遠山にもゆる火ほご
の我がこころかな

あはれなる女の臉戀ひ撫でてその夜ほごほど
われは死にけり

このこころ葬はならんとして來きたりぬれ畑はたには麥は
赤らみにけり

夏されば農園に來て心ぐし水すましをばつか
まへにけり

麥の穂むぎこに光ひかりながれてたゆたへば向むかうに山羊は
啼なきそめにけれ

藻のなかに潜ひそむるもりの赤き腹はつか見そめ
てうつつともなし

この心葬はなり果てんと秀はの光る錐きりを疊はにさしに
けるかも

わらじ蟲たたみの上に出で來こしに烟草のけむ
りかけて我居り

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べ
に降りてゐるかも

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に
雨のふる見ゆ

瑠璃いろにこもりて圓き草の實はわが戀人の
まなこなりけり

ひんがしに星いづる時汝が見なばその眼ほの
ぼのさかなしくあれよ (五月六月作)

8 きさらぎの日

きやう院を早くまかりてひさびさに街を歩め
 ばひかり目に染む

平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかき下衣を着た
 りけるかも

きさらぎの天のひかりに飛行船ニコライでら
 の上を走れり

杵あまた竝べばかなし一様につぼの白米に落
 ち居たりけり

杵あまた馬のかうべの形せりつぼの白米に落
 ちにけるかも

もろともに天を見上げし耶蘇士官あかき下衣
を着たりけるかも

きさらぎの市路を來つつほのほのと紅き下衣
の悲しかるかも

救世軍のをそこ兵士はくれなるの下衣着たれ
ば何とすべけむ

まぼしげに空に見入りし女あり黄色のふね天
馳せゆけば

二月ぞら黄いろき船が飛びたればしみじみと
をんなに口觸るかなや

この身は何か知らねごとほしく夜おそく
ゐて爪きりにけり (三月作)

9 口 ぶ え

このやうに何なにに頼たの骨ぼねたかきかや觸ふりて見れば
をんななれども

この夜よをわれと寝ねる子のいやしさのゆゑ知ら
ねども何か悲しき

目をあけてしぬのめぐろと思ほえばのびのび
と足をのばすなりけり

ひんがしはあけぼのならむほそほそと口笛ふ
きて行く童子こどもあり

あかねさす朝明けゆるにひなげしを積みし車
に會ひたるならむ (五月作)

10 神田の火事

これやこの昨日の夜の火に赤かりし跡どころ
なれけむり立ち見ゆ

天明けし焼跡どころ焼えかへる火中に音の聞
えけるかも

亡ぶるものは悲しけれども目の前にかかれど
てしも赤き火にほろぶ

たちのぼる灰燼のなかにくろ眼鏡白き眼鏡を
賣れりけるかも

和あゆみ眼鏡よろしと言あげてみづからの眼
に眼鏡かけたり (三月作)

11 女學院門前

賣藥商人しろき帽子をかかぶりて歌ひしかも
よ薬のうたを

賣薬商人くすりを賣ると足竝をそろへて歌を
うたひけるかも

驢馬にのる少年の眼はかがやけり薬のうたは
向うにきこゆ

芝生には小松きよらに生ひたれば人間道の薬
かなしも

あかねさす晝なりしかば少女らのふりはへ袖
はながかりしかも (三月作)

12 吳竹の根岸の里

にんげんの赤子を負へる子守居りこの子守は
も笑はざりけり

日あたれば根岸の里の川べりの青路のたう揺
りたつらんか

くれたけの根岸里べの春淺み屋上の雪凝りて
うごかず

天のなか光りは出でて今はいま雪さんらんと
かがやきにけり

角兵衛のをさな童のをさなさに涙ながれて我
は見んぞす

笛の音のそろりほろろと鳴りたれば紅色こうしよくの獅子
子あらはれにけり

いとけなき額ひたむのうへにくれなるの獅子の頭あたまを
見そめしかもよ

春のかせ吹きたるならむ目のもこの光ひかりのなか
に塵うごく見ゆ

ながらふる日光のなか一いろに我のいのちの
めぐるなりけり

あかあかど日輪天てんにまはりしが猫やなぎこそ
ひかりそめぬれ

くれなるの獅子のあたまは天あめなるや廻轉くわいてん光くわうに
ぬれるたりけり (二月作)

13 さんげの心

雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔さんげの
心かなしかれども

こよひはや學問したき心起りたりしかすがに
われは床にねむりぬ

風引きて寝てゐたりけり窓の戸に雪ふる聞きゆ
さらさらといひて

あわ雪は消けなば消ぬがにふりたれば眼悲さんげしく
消ぬらくを見む

腹はらばひになりて朱の墨すりしころ七面鳥に泡
雪はふりし

ひる日中床の中より目をひらき何か見つめんと
思ほえにけり

雪のうへ照る日光のかなしみに我がつく息は
ながかりしかも

赤電車にまなこ閉づれば遠國へ流れて去なむ
こころ湧きたり

家ゆりてごごろと雪はなだれたり今夜は最早
幾時ならむ

しんしんと雪ふる最上の上の山弟は無常を感
じたるなり

ひさかたのひかりに濡れて縦しるやし弟は無
常を感じたるなり

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪は
なだれ果てたり

天霧らし雪ふりてなんちが妻は細りつつ息を
つかんとすらし

あまつ日に屋上の雪かがやけりしづごころ無
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪に見入りつつ何を求め
むとする心ぞも

いまわれはひとり言いひたれどもあはれ哀れ
かかはりはなし

家にゐて心せはしく街ゆけば街には女おほく
ゆくなり (二月作)

14 墓 前

ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり (八月作)



14 墓前

ひつそりと心なやみて水かける松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のながよりふふみたる水くさの
花小さかりけり (八月作)



明治四十五年
大正元年

1 雪ふる日

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもの見ゆ

現身うつしなみのわが血脈けつみやくのやや細り墓地にしんしんど
雪つもの見ゆ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ四人のこころ
われに湧きたり

わが庭に驚ら啼きてゐたれども雪こそつもれ
庭もほごろに

ひさかたの天の白雪ふりきたり幾とき経ねば
つもりけるかも

批把の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐み
しまらくも見し

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひの
しらじらと降る

天つ雪はだらに降れどさにづらふ心にあらぬ
心にはあらぬ (十二月作)

2 宮益坂

莊嚴しやうげんのをんな欲ほして走りたるわれのまなこに
高山たかやまの見ゆ

風を引き鼻汗はなながれたる一人男ひとりをとこは駈足をせず
富士の山見けり

これやこの行くもかへるも面黄おもなる電車終點
の朝ぼらけかも

狂者きやうしやもり眼鏡めがねをかけて朝ぼらけ狂院へゆかす
富士の山見居り

馬に乗りりくぐん將校きたるなり女難の相か
然しかにあらずか

向ひには女は居たり青き甕もち童子になにか
いひつけしかも

天竺のほとけの世より女人居りこの朝ぼらけ
をんな行くなり

雪ひかる三國一の富士山をくちびる紅き女も
見たり(十二月作)

3 折に觸れて

くろぐろと圓らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬ
つゆじもはふり

藏王山に雪かもふるといひしときはや班なり
こいらへけらすや

狂者らは Paederastie をなせりけり夜しんしんこ
更けがたきかも

ゴオガンの自画像みればみちのくに山ヤマ登ト殺スし
しその日おもほゆ

をりをりは脳解剖書讀むことありゆゑ知らに
心つつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきた
りつつ消えにけるかも

身ぬちに重大を感せざれども宿直ソクヂツのよるにう
なじ垂れるし

この里サトに大山大將住むゆゑにわれの心の嬉し
かりけり (十二月)

4 青山の鐵砲山

赤き旗けふはのぼらずどんたくの鐵砲山に小
供らが見ゆ

日だまりの中なかに同様のうなるらは皆走りつつ
居たりけるかも

銃丸を土より掘りてよろこべるわらべの側そばを
行き過ぎりけり

青竹を手に振りながら童子ごうじ来て何か落ちるぬ
面おもてもちをせり

ゆふ日さほく金かねにひかれば群童は眼めつむりて
斜面をころがりにつけり

群童が皆ころがれば丘のへの童女こわらなかなしく笑
ひけるかも

いちにんの童子ころがり極まりて空見たるか
な太陽が紅し

射的場に細みづ湧きて流れければ童わらへふたりが
水のべに來し (十月作)

5 ひそりの道

霜ふればほろほろと胡麻ごまの黒き實みの地つちにつく
なし今わかれなむ

夕ゆふ凝こりし露霜ふみて火を戀こひむ一人ひとりのゆるるに
こころ安けし

ながらふるさ霧のなかに秋花を我摘まんぞす
人に知らゆな

自雲は湧きたつらむか我ひとり行かむと思ふ
山のはざまに

神無月空の果てよりきたるとき眼ひらく花は
あはれなるかも

獨りなれば心安けし谿ゆきてくちびる觸れむ
木の實ありけり

ひかりつつ天を流るる星あれど悲しきかもよ
われに向はず

行くかたのうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤きに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつつ峽せきに入りけり

みなし兒に似たるこころは立ちのぼる白雲に
入りて歸らんとせず

もみぢ斑に照りとほりたる日の光りはさまに
われを動かざらしむ

わが歩みここに極まれ雲くだるもみぢ斑のな
かに水のみにけり

はるばるも山峽やまがせきに来て白樺に觸ふりて居たり獨ひき
りなりけれ

ひさかたの天あめのつゆじもしとしとど獨り歩ま
む道ほそりたり (十一月作)

6 葬り火

黄涙餘録の

あらはなる棺ひつぎはひとつかつがれて穩田ぼしを
今わたりたり

自殺じそくせし狂者きやうじやの棺くわんのうしろより眩暈めまいして行け
り道みちに入日ひあかく

陸橋りくきやうにさしかかるとき兵へい來れば棺ひつぎはしまし地つち
に置かれぬ

泣なきながすわれの涙なみだの黄きなりとも人に知らゆ
な悲かなしきなれば

鴉からすらは我われはねむりて居たるらむ狂人きやうじんの自殺じそく果
てにけるはや

死なねばならぬ命いのちまもりて看護婦いんちゆうはしろき火
かかぐ狂院きやういんのよるに

自みづからのいのち死しなんど直ひたいそぐ狂人きやうじんを守もりて
火ひも戀こひひねごも

土つちのうへに赤棟あかむね蛇遊へびあそびばすなりにけり入る日ひあ
かあかど草くさはらに見ゆ

歩兵隊ふへいだい代々よよ木きのはらに群ぐれゐしが狂人きやうじんのひつ
ぎひとつ行いくなり

赤光あかひかりのなかに浮うびて棺くわんひとつ行いき遙はるけかり野
は涯はてならん

わが足あしより汗あせいでてやや痛みいたみあり靴くつにたまり
し土つちほこりかも

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひさが
米を磨ぎたれば

死はも死はも悲しきものならざらむ目のもと
に木の實落つたはやすきかも

兩手をばズボンの隠しに入れ居たりおのが身
を愛しと思はねごさびし

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはら
に男居りけり

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをここ
が欠伸をしたり

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾
くゆふさり來り

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならび
たりけり

上野なる動物園にかささぎは肉食ひゐたりく
れなるの肉を

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡の
ほこり拭ふなりけり

7 冬 來

黄涙餘録の二

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世
に戦きにけり

けだものは食もの戀ひて啼き居たり何といふ
やさしさぞこれは

ペリガンの嘴くちばしうすら赤くしてねむりけりかた
はらの水みづ光ひかりかも

ひたいそぎ動物園にわれは來きたり人のいのち
をおそれて來きたり

わが目より涙ながれて居たりけり鶴つるのあたま
は悲かなしきものを

けだもののにほひをかげば悲かなしくもいのちは
明あく息いきづきにけり

支那しな國こくのほそき少女しょうじょの行きなづみ思おもひそめに
しわれならなくに

さけび啼なくけだもの邊へに潜ひそみゐて赤あかき葬はなり
の火ひこそ思おもへれ

鱈の子も居たりけりみづからの命死なんどせ
すこの鱈の子は

くれなるの鶴のあたまを見るゆゑに狂人守を
かなしみにけり

はしきやし曉星學校の少年の頬は赤羅ひきて
冬さりにけり

泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをれば
しづかなるかも

除隊兵寫眞をもちて電車に乗りひんがしの天
明けて寒しも

はるかなる南のみづに生れたる鳥ここにゐて
なに欲し^ほみ啼く

8 柿乃村人へ

黄涙餘録の三

この夜ごろ眠られなくに心すら細らんとして
 告げやらましを

たのまれし狂者きやうじやはつひに自殺せりわれ現うつなく
 走りけるかも

友のかは青ざめてわれにももの云はす今は如何
 なる世の相すがたかや

おのが身はいごほしければ赤棟蛇も潜みたる
 なり土の中なまかふかく

世の色相いろさうのかたはらにゐて狂者もり黄なる涙
 は湧きいてにけり

やはらかに弱きいのちもくるぐると甲はんと
してうつつともなし

寒ぞらに星ゐたりけりうらがなしわが狂院を
ここに立ち見つ

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗來より悲し
かるらむ

みやこにも冬さりにけり茜さす日向のなかに
髭剃りて居る

遠國へ行かば剃刀のひかりさへ馴れて親しと
いへば歎かゆ (十一月作)

9 郊外の半日

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來
て寒さむけをおぼゆ

郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは
和なごむとすらん

郊外こうがいに未いまだ落ちぬころもてはつた蟻あまにぎれば
冷つめたきものを

秋のかせ吹きてゐたれば遠かろかたの薄すすのなかに
曼珠沙華赤し

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し
秋かせが吹き

いちめんの唐辛子畑に秋のかせ天より吹きて
鴉おりたつ

いちめん唐辛子あかき畑みちに立てる童の
まなこ小さし

曼珠沙華咲けるごころゆ相むれて現身に似ぬ
囚人は出づ

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元の
目の光かも

楮士はこぶ囚人の眼の光るころ茜さす日は傾
きにけり

トロッコを押す一人の囚人はくちびる赤し我
をば見たり

片方に松二もとは立てりしが囚はれ人は其處
を通りぬ

秋づきて小さく結びし茄子の果を籠に盛る家
の日向に蠅居り

女のわらは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄
子のか黒きひかり

天傳ふ日は傾きてかくろへば栗煮る家にわれ
いそぐなり

いそまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せば
悲しこよなし

コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に残
る光を見つつ (十月作)

10 海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚にはくれなるの玉
ぬれてゐるかな

海の香は山の彼方に生れたるわれのこころに
こよなしかしも

七夜寝て珠る海の香をかげば哀れなるかも
この香いとほし

白なみの寄するなぎさに林檎食む異國をみな
はやや老いにけり

あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅
のゆらゆらに見ゆ

きこゆるは悲しきさざれうち浸す潮波とごろ
湧きたるならむ

うしほ波鳴りこそきたれ海戀ひてここに寝る
吾に鳴りてこそ來れ

もも鳥はいまだは啼かね海のなか黒光りして
明けくるらむか

岩かげに海ぐさふみて玉ひろふくれなるの玉
むらさき斑のたま

海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのこころ
に染みてこそ寄れ

櫻實の落ちてありやと見るまでに赤き珠住む
岩かげを來し

ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野小草
に似てを悲しも

荒磯べに歎くともなき蟹の子の常くれなるに
見ゆらむあはれ

かすかなる命をもちて海つもの美しくゐる荒
磯なるかな

いささかの潮のたまりに赤きもの生きて居た
れば嬉しむかな

荒磯べに波見てをればわが血なし瞬きの間も
かなしかりけり

海のべに紅毛の子の走りたるこのやさしさに
我かへるなり

かぎろひの夕なぎ海に小舟入れ西方さいほうのひとは
ゆきにけるはも

くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えすも

月ほそく入りなんとする海の上ここよ遙けく
舟なかりけり

ぬば玉のさ夜ふけにして波の穂の青く光れば
戀しきものを

けふもまた岩かげに來つ靡き藻に虎斑魚こまづなの子
かくろへる見ゆ

しほ鳴なのゆくへ悲しと海のべに幾夜か寝つる
この海のべに

11 狂人守

うけもちの狂人も幾たりか死にゆきて折をり
あはれを感じるかな

かすかなるあはれなる相ありこれの相に親し
みにけり

くれなるの百日紅は咲きぬれど此きやうじん
はもの云はずけり

ごしわかき狂人守りのかなしみは通草の花の
散らふかなしみ

氣のふれし支那のをみなに寄り添ひて花は紅
しど云ひにけるかな

このゆふべ脳病院の二階より墓地見れば花も
見えにけるかな

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゝるらむ

あはれなる百日紅の下かげに人力車ひこつ見
えにけるかな (九月作)

12 土屋文明へ

おのが身をあはれとおもひ山みづに涙を落す
人居たりけり

ものみなのおどろゆるがごとき空戀ひて鳴かねば
ならぬ蟬のこゑ聞ゆ

もの書かむと考へるたれ耳ちかく鯛なけばあ
はれにきこゆ

夕さればむらがりにて来る油むし汗あえにつつ
殺すなりけり

かかる時菴羅あまらの果をも戀ひたらば心落居むと
おもふ悲しみ

むらさきの桔梗のつぼみ割りたれば蓋ふたあらは
れでにくからなくに

秋ぐさの花さきにけり幾朝をみづ遣りしかと
おもほゆるかも

ひむがしのみやこの市路ひとつのみ朝草ぐる
ま行けるさびしも (七月作)

13 夏の夜空

墓原に来て夜空見つ目のきはみ澄み透りたる
この夜空かな

なやましき眞夏なれども天なれば夜空は悲し
うつくしく見ゆ

きやう人を守りつつ住めば星のゐる夜ぞらも
久に見ずて經にけり

目をあげてきよき天の原見しかども遠の珍の
こころこそすれ

ひさびさに夜空を見ればあはれなるかな星群
れてかがやきにけり

空見ればあまた星居りしかれども彌々とほく
ひかりつつ見ゆ

汗ながれてちまたの長路ゆくゆるにかうべ垂
れつつ行けるなりけり

久ひさに星ぞらを見て居りしかばおのれ親し
くなりてくるかも (七月作)

14 折々の歌

そろそろとあかき落葉火もえしかば女の男の
童をどりけるかも

雨ひと夜さむき朝けを目の下の死なねばなら
ぬ鳥見て立てり

をんな寝る街の悲しきひそみ土ここに白霜は
消えそめにけり

猫の舌のうすらに紅き手の觸りのこの悲しき
に目ざめけるかも

ほのかなる茗荷の花を見守る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたま
けてひもじかりけり (研究室二首)

屈まりて腦の切片を染めながら通草のはなを
おもふなりけり

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶり
目ざめけらしも (故郷三首)

みちのくに病む母上にいささかの胡瓜を送る
障りあらずな

おきながさに唇ふれて歸りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつも

曼珠沙華ここにも咲きてきその夜のひと夜の
相あらはれにけり

秋に入る練兵場のみづたまりに小蜻蛉が卵を
生みて居りけり

現身のわれをめぐりてつるみたる赤き蜻蛉が
幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室に食むこころ腎虚のくすり
尋ねゆくこころ

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば
飲ませてゐたり

太陽はかくろひしより海のうへ天の血垂りの
こころよろしき

狂院に寝てをれば夜は温るし我に觸るるなし
蟾蜍は啼きたり

伽羅ぼくに伽羅の果こもりくるき猫ほそりて
あゆむ夏のいぶきに

蛇の子はぬば玉いろに生れたれば石の間にも
かくろひぬらむ

ほそき雨墓原に降りぬれてゆく黒土に烟草の
吸殻を投ぐ

墓はらを白足袋はきて行けるひと遠く小さく
悲しかりけり

萱草^{いんざう}をかなしと見つる眼にいまは雨にぬれて
行く兵隊が見ゆ

墓はらを歩み來にけり蛇の子を見むと來つれ
ど春あさみかな

病院をいでて墓原かげの土踏めば何^{なに}になごみ
來しあが心ぞも

松風の吹き居^ゐるところくれなるの提灯つけて
分け入りにけり

15 さみだれ

さみだれは何なにに降りくる梅の實は熟うみて落つ
らむこのさみだれに

にはどりの卵の黄味の亂れゆくさみだれごろ
のあぢきなきかな

胡こ頰が子の果のあかき色ほに出づるゆゑ秀はに出
づるゆゑに歎かひにけり (おくにを憶ふ)

ぬば玉のさ夜の小床にねむりたるこの現身うらは
いとほしきかな

しづかなる女おもひてねむりたるこの現身うらは
いとほしきかな

鳥の子の船ふねに果てむこの心もののはれと云
はまくは憂し

あが友の古泉千櫛は貧しけれさみだれの中を
あゆみゐたりき

けふもまた雨かどひどりごちながら三州味噌
をあぶりて食はむも (六月作)

16 兩 國

肉しし太ぎの相撲あきとりこそかなしけれ赤き入り日に
目まかげをしたたり

川かは向むかうの金の入日をいまさらに今さらさらに我われ
も見入りつ

猿の肉ひさげる家に灯ひがつきてわが寂しさは
極まりにけり

猿の面おもいと赤くして殺されにけり兩國ふたばしを
渡り来て見つ

きな臭くさき火繩おもほゆ藥種屋に龜の甲羅のふ
らさがり見ゆ

笛鳴ればかかれとてしもぬば玉の夜よの灯ひとも
りて舟ゆきにけり

冬河の波にさやりてのぼる舟橋のべにこ来て帆
を下ろしつ

あかき面安らかに垂れ稚わかな猿死にてし居れば
灯ひがあたりたり (二月作)

17 犬の長鳴

よる深くふと握飯食ひたくなり握めし食ひぬ
寒がりにつつ

わが體ねむらむとしてゐたるとき外はこがら
しの行くおとさきこゆ

遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は
行きにけるかも

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火
は燃えにけり

さ夜ふけど夜の更けにける暗黒にびようびよ
うと犬は鳴くにあらずや

たちのぼる炎ほのほのにはひ一天ひそあめを離さかりて犬は感じ
けるはや

夜の底よをからくれなるに燃ゆる火の天あめに輝てり
たれ長鳴ながなききこゆ

生けるものうつつに生ける獸けだものはくれなるの火
に長鳴ながなききにけり (三月作)

18 木

こり

羽前國高湯村

常赤とこあかく火をし焚たかんと現あらわし身は木原きはらへのぼる
こころのひかり

山腹やまはらの木はらのなかへ堅凝かたこりのかがよふ雪を
踏みのぼるなり

天のもと光にむかふ檜木はら伐らんとぞする
男とをんな

をそこ群れをんなは群れてひさかたの天の下
びに木を伐りにけり

さんらんご光のなかに木伐りつつにんげんの
歌うたひけるかも

ゆらゆらご空気を揺りて伐られたりけり斧の
ひかれば大木ひごもご

山上に雲こそ居たれ斧ふりてやまがつの目は
かがやきにけり

うつそみの人のもろもろは生きんとし天然の
なかに斧ふり行くも

斧ふりて木を伐るそばに小夜床の陰のかなし
さ歌ひてゐたり

もろともに男の面の赤赤と小雀もゐつつ山み
づの鳴る

雪のうへへ行けるをんなは堅飯と赤子を脊負ひ
うたひて行けり

雪のべに火がごろごろと燃えぬれば赤子は乳
をのみそめにけり

うち日さす都をいでてほそりたる我のこころ
を見んとおもへや

杉の樹の肌はだへに寄ればあな悲しかな くれなるの油あぶら
滲み出るかなや

はるばるも來つれこころは杉の樹の紅あけの油に
寄りてなげかふ

遠天えんてんに雪かがやけば木原なる大鋸おがくづ越えて
小便をせり

みちのくの藏王ざうおうの山のやま腹にけだものど人
と生きにけるかも (三月作)

19 木の實

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程いくばくもなき
歩みなりけり

満ち足らふ心にあらぬ 谷つべに酔をふける
木の實を食むころかな

山とほく入りても見なむうら悲しうら悲しと
ぞ人いふらむか

紅葦の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず
見つつ來にけり

山ふかく谿の石原しらじらと見え來るほどの
いとほしみかな

かうべ垂れ我がゆく道にぼたりぼたり橡の木
の實は落ちにけらすや

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと
思ひて飯はむ (二月作)

20 睦岡山中

寒さむざむとゆふぐれて來る山のみち歩めば路は
濕ぬれてゐるかな

山ふかき落葉のなかに夕ゆふのみづ天あまより降りて
ひかり居りけり

何なにものの眼まなこのごときひかりみづ山の木はらに
動かうざるかも

現ひまし身の瞳まなこかなしく見入りぬる水はするごとく
寒さむくひかれり

都會みやこのごよみをとほくこの水に口觸れまくは
悲かなしかるらむ

天さかる鄙ひなの山路にけだものの足跡あしあとを見れば
 こころよろしき

なげきより覺さめて歩める山峽やまがひに黒き木の實は
 こぼれ腐りぬ

寂さびしさに堪へて空しき我が肌かみに何か觸ふれて來こ
 悲かなしかるもの

ふゆ山にひそみて玉のあかき實みを啄つばみてゐる
 鳥見とりみつ今は

風おこる木原きはらをどほく入りつ日の赤き光りは
 ふるひ流るも

赤光しやくくわうのなかの歩みはひそが夜の細きかほそき
 ゆめごころかな (二月作)

21 或る夜

くれなるの鉛筆きりてたまゆらは慎しきかな
われのこころの

をさな妻をよめとなりて幾百日こよひも最早
眠りゐるらむ

寝ねがてにわれ烟草すふ烟草すふ少女は最早
眠りゐるらむ

いま吾は鉛筆をきるその少女安心をして眠り
ゐるらむ

わが友は密柑むきつつ染じみとはや抱きねと
いひにけらすや

けだものの暖かさうな寝すがた思ひうかべて
 獨りねにけり

寒床にまろく縮まりうつらうつら何時のまに
 かも眠りゐるかな

水のべの花の小花の散りごころ盲目になりて
 抱かれて呉れよ (二月作)

明治四十四年

1 此の日頃

よるさむく火を警むるひようしぎの聞え來る
頃はひもじかりけり

この宵はいまだ淺けれ床ぬちのびつつ何か
考へむとおもふ

尺八のほろほろと行く悲し音はこの世の涯に
遠ざかりなむ

入りつ日の赤き光のみなぎらふ花野はとほく
恍惚溶くるなり

さだめなきものの魔の來る如く胸ゆらぎして
街をいそげり

うらがなしいかなる色の光はや我のゆくへに
かがよふらむか

生くるもの我のみならず現し身の死にゆくを
聞きつつ飯食しにけり

をさな兒のひさり遊ぶを見守りつつ心よろし
くなりてくるかも (二月作)

2 おく に

なにか言ひたかりつらむその言も言へなくな
りて汝は死にしか

はや死にてゆきしか汝いとほしと命のうちに
吾はいひしかな

とほ世べに往なむ今際の目にあはす涙ながら
に嬉しむものを

なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に
吾は言へりしか

これの世に好きななんぢに死にゆかれ生きの
命の力なし我は

あのやうにかい細りつつ死にし汝があはれに
なりて居りがてぬかも

ひとたびは癒りて呉れよとうら泣きて千重に
いひたる空しかるかな

この世にも生きたかりしか一念も申さず逝き
しよあはれなるかも

何も彼もあはれになりて思ひづるお國のひと
世はみぢかかりしか

にんげんの現實は悲ししまらくも漂ふごとき
ねむりにゆかむ

やすらかな眠もがもど此の日ごろ眠ぐすりに
親しみにけり

なげかひも人に知らえず極まれば何なにに絶りて
吾は行きなむか

しみ到いたるゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおき
のなつかしきかも

現う身のわれなるかなと歎なげかひて火鉢をちかく
身に寄せにけり

ちから無く鉛筆きればほろほろと紅くれなるの粉が落
ちてたまるも

灰のへにくれなるの粉の落ちゆくを涙ながし
ていとほしむかも

生きてゐる汝ながすがたのありありと何なにに今頃
見えきたるかや 二月作

3 うつし身

雨にぬるる廣葉細葉のわか葉森あが言ふ聲の
やさしくきこゆ

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の揺も
見むとしおもふ

しみじみとおのに親しきわがあゆみ墓はらの
蔭に道ほそるかな

やはらかに濡れゆく森のゆきすりに生いきの疲つかれの
吾をこそ思へ

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふる
よ若葉かへるで

にんげんは死にぬ此のごと吾は生きて夕いひ
食しに歸へらなむいま

黒土に足駄の跡の弱けれどおのが力とかへり
見にけり

うちごよむ衢のあひの森かげに残るみづ田を
いとしくおもふ

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして
雨ふりにけり

森かげの夕ぐるる田に白きとり海そりに似し
ひるがへり飛ぶ

寂し田に遠來し白鳥見しゆるゑに弱ければ吾は
うれしくて泣かゆ

くわん草は丈ややのびて濕りある土に戦げり
このいのちはや

はるの日のながらふ光に青き色ふるへる麥の
嫉くてならぬ

春淺き麥のはたけにうごく蟲手ぐさにはすれ
悲しみわくも

うごき行く蟲を殺してうそ寒く麥のはたけを
横ざりにけり

いさけなき心葬りのかなしさに蒲公英を掘る
せさの岡べに

仄かにも吾に親しき豫言をいはまくすらしき
黄いろ玉はな

(四月五月作)

4 うめの雨

おのが身をいそほしみつつ歸り來る夕細道に
柿の花落つも

はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば
共に行きなむ

さみだれのけならべ降れば梅の實の圓大きく
ここよりも見ゆ

天に戦ぐほそ葉わか葉に群ぎもの心寄りつつ
なげかひにけり

かぎろひのゆふさりくれぞ草のみづかくれ水
なれば夕光なしや

ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙かへるはあはれ
啼きたるかなや

うつそみの命は愛なしとなげき立つ雨の夕原ゆふばらに
音ねするものあり

くろく散る通草あけびの花のかなしさを稚なくてこそ
おもひそめしか

おもひ出も遠き通草の悲し花きみに知らえず
散りか過ぎなむ

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる
夜の雨ふり

汝兄なよ汝兄なたまごが鳴くといふゆゑに見に行
きければ卵が鳴くも

あぶなくも覺束おぼつかなけれ黄いろなる圓きうぶ毛
が歩みてゐたり

見てを居り心よろしも鶏の子はつ**い**ばみ乍なら
るねむりにけり

庭つとり鶏かひのひよこも心こころがなし生れて鳴けば
母にし似るも

乳のまぬ庭どりの子は自おのづから哀あはれなるかも
よもの食はみにけり

常のごと心足らはぬ吾にあれひもじくなりて
今かへるなり

たまたまに手なご觸れつつ添たひ歩む枳か殻た垣かに
ほこりたまれり

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさ
のうらがなしかり

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそ
別れゆくかも

天さかり行くらむ友に口寄せてひそかに何か
いひたきものを (五月六月作)

5 藏王山

藏王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻あづまの山に
雲のゐる見ゆ

たち上のぼる白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり
白くものなかに

ま夏日の目のかがやきに櫻の實熟みて黒しも
われは食みたり

あまつ日に目蔭をすれば乳いろの湛かなしき
みづうみの見ゆ

死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色
みづ見ゆるかな

秋づけばはらみてあゆむけどものも酸のみづ
なれば舌觸りかねつ

赤蜻蛉むらがり飛べごこのみづに卵うまねば
かなしかりけり

ひんがしの遠空にして絹いこのひかりは悲し
海つ波なれば (八月作)

6 秋の夜ごろ

玉きはる命いのちをさなく女童わらわをいだき遊びき夜半よな
のこほろぎ

こよひも生きてねむるところつらうつら悲しき
蟲を聞きほくるなり

ことわりもなき物怨うらみみ我身にもあるが愛あいしく
蟲ききにけり

少年の流されびとのいさほしと思ひにければ
こほろぎが鳴く

秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土を
かなしみにけり

少年の流され人はさ夜の
小床に蟲なくよ何の
蟲よといひけむ

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに
堪へにけるかな

蟋蟀の音にいづる夜の静けさにしろがねの錢
かぞへてゐたり

紅き日の落つる野末の石の間のかそけき蟲に
あひにけるかも

足もこの石のひまより静けさに顛ひて出づる
音に頼りにけり

入りつ日の入りかくろへば露滿つる秋野の末
にこほろぎ鳴くも

うちごよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る
原にわれは來にけり

星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりに
こほろぎ鳴くも

こほろぎのかそけき原も家ちかみ今ほほ笑ふ
女の童わらわきこゆ

はるばるこ星落つる夜の戀がたり悲しみの世
にわれ入りにけり

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな
夕ひかりつつ

女の童わらわをさめこなりて泣きし時かなしく吾は
おもひたりしか

さにづらふ少女ごころに酸漿はまづきの籠かごらふほどの
悲しみを見し

ひそり歩む玉ひや冷さうら悲し月より降りし
草の上の露

こほろぎはこほろぎゆるるに露原に音をのみぞ
鳴く音をのみぞ鳴く(九月作)

7折に觸れ

なみだ落ちて懐なつかしむかもこの室むろにいにしへ人
は死に給ひにし(宇規十周忌三首)

自みづからをさげすみ果てし心すら此夜はあはれ
和なごみてを居ぬ

しづかに眼をつむり給ひけむ自づからすべて
は冷たくなり給ひけむ

涙ながししひそか事も、消ゆるかや、吾より
秋なれば桔梗は咲きぬ (録三首)

さちかうのむらさきの花萎む時わが身は愛し
とおもふかなしみ

さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしき
ことありあはれあはれわが少女

栗の實の笑みそむるころ谿越えてかすかなる
灯に向ふひとあり (録三首)

かごはかしの逢へるをよめのうつくしと思ひ
通ひて谿越えにけり

うつくしき時代ときなるかな山賊やまぞろはもみづる谿たにに
いのち落せし

おのづからうら枯るるらむ秋あきぐさに悲かなしかる
かも實籠みかごりにけり

ひさかたの霜しもふる國くにに馬群うまぐみれてながながし路
くだるさみしみ

死しに近ちかき狂人きやうじんを守まもるはかなさに己おのが身みすらを
愛あいしこなげけり

照あり透とるひかりの中なかに消ぬべくも蟋蟀せせりと吾われと
なげかひにけり

つかれつつ目めざめがちなるこの夜よごろ寐ねより
さめ聞きくながれ水みづかな

朝さざれ踏みの冷めたくあなあはれ人の思おもの
湧ききたるかも

秋川のさゞれ踏み行き踏み來とも落ちるぬ心
君知るらむか

土のうへの生けるものらの潜ひそむべくあな慌し
秋の夜の雨

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽も
ひろげず

寒ざむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥
をいたはり兼ねつ

ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる
國へとほ去りぬらむ

8 遠き世のガレノスは春のあけぼの
Ornamentum loei をかなしみぬ。われは
東海の國の伽羅の木かけ Pluma loei と
いひてなげかふ。

伽羅ぼくのこのみのごとく仄かなるはかなき
ものか Pluma loei よ

ほのかなるものなりければをさめごはほほと
笑ひてねむりたるらむ

明治四十三年

1 田螺と彗星

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺
はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも春戸の圓田まろたにゐると鳴かねごころり
ころりと幾つもあるも

わらくすのよごれて散れる水無田みなだに田螺たごの殻
は白くなりけり

氣ちがひの面おもてまもりてたまさかは田螺たごも食たべ
てよるいねにけり

赤いろの蓮はらまる葉の浮けるとき田螺たごはのどに
みごもりぬらし

味噌うづの田螺たごたうべて酒のめば我が咽のど喉は佛ぼ
うれしがり鳴る

南蠻なんばんの男かなしと戀ひ生みし田螺たごにほとけの
性さがともしかり

ためらはす遠天とんてんに入れと彗星すいせいの白きひかりに
酒さけたてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほごなる
ははき星をり

きさらぎの天たかくして彗星ありまなこ光り
てもろもろは見る

入り日ぞら暮れゆきたれば尾を引ける星にむ
かひて子等走りたり

2 南蠻男

くれなるの千しほのころも肌につけゆららゆ
ららに寄りもこそ寄れ (録八首)

南蠻のをどこかなしと抱かれしをだまきの花
むらさきのよる

なんばんの男いだけば血のこゑすその時のま
の血のこゑかなし

南より笛吹きて来る黒ふねはつばくらめより
かなしかりけり

夕がらす空そらに啼ければにつぼんの女をんなのくちも
あかく觸りぬれ

入り日空ひそら見たる女はうらぐはし乳房ちちうおさへて
居たりけるかな

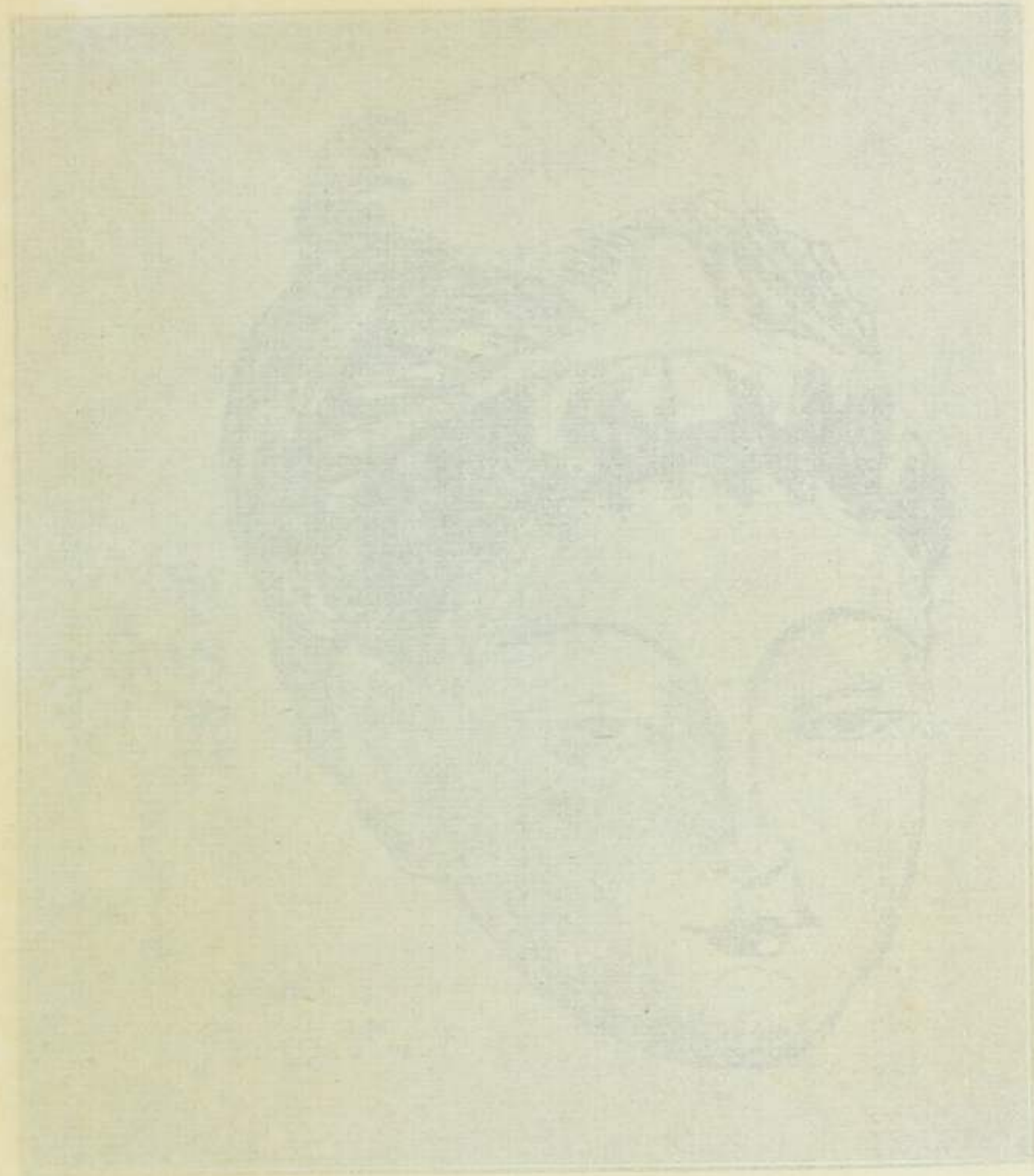
瞳ひとみ青きをこ悲し島をさめほのぼのとして
みごもりにけり

なんばんの黒ふねゆれてはてし頃みごもりし
人いまは死にせり

にほひたる疊のうへに白たまの静まりたるを
見すぐしがてぬ (録三首)

しらたまの色のにほひを哀あはれとぞ見し玉ゆらの
われやつみびと

罪ひとの觸れんとおもふしら玉の戦なりのきたらば
すべなからまし





見すすしがでぬ
 (録三首)

しらたまの色の
 われやつみびと

罪ひとの觸れんとおもふしら玉の戦きたらば
 すべなからまし

3をさな妻

墓はらのごほき森よりほろほろと上^{のは}るけむり
に行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさに
づらふ時たちにつけり

をさな妻こころに持ちてあり經れば赤き蜻蛉
の飛ぶもかなしも

目を閉づれすなほち見ゆる淡々し光に戀ふる
もさみしかるかな

ほこり風立ちてしづまるさみしみを市路ゆき
つつかへりみるかも

このゆふべ塀にかわけるさび紅のべにがらの
垂りをうれしみにけり

公園に支那のをごめを見るゆるに幼な妻もつ
この身愛しけれ

嘴あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛
ばは悲しきろかも

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどの
うれひなりけり

水さびるる細江の面に浮きふむこの水草は
うごかざるかな

汗ばみしかうべを垂れて抜け過ぐる公園に今
しづけさに會ひぬ

をさな妻をさなきままにその目より涙ながれ
て行きにけるかも

をだまきの咲きし頃よりくれなるにゆららに
落つる太陽こそ見にけれ

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細
りたるなれ (折々の作)

4 悼堀内卓

堀内はまこと死にたるかありの世か
いめ世かくやしいたましきかも

信濃路のゆく秋の夜のふかき夜をなにを思ひ
つつ死にてゆきしか

うつそみの人の國をば君去りて何邊にゆかむ
ちちははをおきて

早はやも癒りて來よと祈むわれになにゆゑに
逝きし一言もなく

いまよりはまことこの世に君なきかありと思
へごうつつにはなきか

深き夜のとづるまなこにおもかげに見えくる
友をなげきわたるも

霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつゝ聞か
むと思ひたりしか (十月作)

自明治三十八年
至明治四十二年

浅草の佛つくりの前來れば少女まぼしく落日
を見るも

黒き實の圓らつぶらとひかる實の柿は一本
ちにけるかも

1 折に觸れ

明治三十八年作

本よみて賢くなれど戦場のわが兄は錢を呉れ
たまひたり

戦場のわが兄より來し錢もちて泣きゐたりけ
り涙が落ちて

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひてちぎりて居れ
ばにほひするかも

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実は
熟みゐたりけり

けふの日は母の邊にゐてくろぐろと熟める桑
の実食みにけるかも

かがやける眞夏日のもとたちねは戦を思ふ
桑の実くろし

馬屋のべにをだまきの花乏しらにをりをり馬
が尾を振りにけり

數學のつもりになりて考へしに五目並べに勝
ちにけるかも

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみを
つばらかに見つ

春かせの吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみ
は大きかりけり

入りかかる目の赤きころニユライの側の坂を
ば下りて來にけり

寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの
赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝ちりしばらく見ねば
みな散りにけり

日輪がすでに眞赤になりたれば物干ものにいでて
欠伸せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まり
て何もせず居り

2 地獄極樂園圖

明治三十九年

淨じやう玻は瓊りにあらはれにけり脇わき差ざしを差して女をんなをい
ぢめるごころ

飯いひの中なかゆごころと上のほる炎ほのほ見てほそき炎えん口の
おごろくごころ

赤き池いけにひとりぼつちの眞裸まはだかのをんな亡者もうじゃの
泣きゐるところ

いろいろの色の鬼おにども集りて蓮はらすの華はなにゆびさ
すところ

人の世よに嘘うそをつきけるもろもろの亡者もうじゃの舌しほを
抜き居ゐるところ

罪計つみばかりに涙なみだながしてゐる亡者もうじゃつみを計れば巖いはほよ
り重おもき

にんげんは馬牛うまうしとなり岩負いわおひて牛頭馬頭ごんづめづども
の追おひ行くところ

をさな兒この積たみし小石こいしを打うくづし紺こんいろの鬼
見てゐるところ

もろもろは裸はだかになれど衣ころも剥ぐひとりの婆の口
赤きところ

白き華はなしろくかがやき赤き華赤き光りを放ち
ゐるところ

ゐるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆら
と下くだり來こるところ

螢

晝見れば首筋
あかき螢かな 芭蕉

螢この室へやに放ちしほたるあかねさす晝なりけれ
ば首は赤しも

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて
飛びて居りけり

あかどきの草の露たま七いろにかがやきわた
り蜻蛉せん生あれけり

あかどきの草に生れて蜻蛉あきつはも未だ軟やわらかみ
飛びがてぬかも

小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生あれし蜻せん
蛉はもかがやきにけり (明治三十九年作)

折に觸れて

明治三十九年作

来て見れば雪げの川べ白がねの柳ふふめり露
の臺も咲けり (二首)

あづさ弓春は寒けど日あたりのよろしき處つ
くづくし萌ゆ

生きて來し丈夫がおも赤くなりをざるを見れば
 嬉しくて泣かゆ (二首)

凱旋り來て今日のうたげに酒をのむ海のます
 らをに髯あらずけり

み佛の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に
 浮くらし (二首)

み佛のみ堂に垂るる藤なみの花の紫いまだと
 もしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて
 並びてを萌ゆ (二首)

春さめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねくふ
 くらみにけり

みちのくの佛ほとけの山のこごしこごし岩いは秀ほに立ち
て汗ふきにけり (立石寺)

天の露落ちくるなべに現し世の野べに山べに
秋花咲けり

涅槃會をまかりて來れば雪つめる山の彼方は
夕焼のすも

小瀧まで行かむは未だくたびれの息つく坂よ
山鳩のこゑ

夕ひかる里つ川水夏くさにかくるる處まるき
山見ゆ

淡青たんじやうの遠とほのむら山たびごろもわが目によしと
寝てを見にけり

火の山を回めぐる秋雲の八百雲をゆらに吹きまく
天つ風かも（藏王山五首）

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れて
かがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清く
山高みかも

雲の中の藏王ざうおうの山は今もかもけだもの住まず
石あかき山

あめなるや月讀の山はだら牛うち臥すなして
目に入りにけり

病癒えし君がにぎ面かほの髯あたり目にし浮びて
うれしくてならず（藤真氏病癒ゆ）

5 蟲

明治四十年作

花につく朱の小蜻蛉ゆふされば眠りけらしも
こほろぎが鳴く

さほ世への戀のあはれをこほろぎの語り部が
夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒は出です
蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲なくと書に残りて
年ふりにけり

なが月の清きよひよひ蟋蟀やねもころころに
率寝て鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず蟲の音も空に消入り
うらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てばつちの蟲音は細細と
悲しらに鳴く

なが月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに蝶^け蛸^らも交り
てよき月夜かも

6 雲

明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の雲旗遠^{とほ}
にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの
湧き卷きのぼる

藏王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも
湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲
誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる
五百つ白雲

遠ひとに吾戀ひ居れば久かたの天のたな雲に
鶴飛びにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の
背に雲ひそむ見ゆ

八重山の八谷かせ起りひさかたの天に白雲の
ゆらゆらと立つ

たくひれのかけのよろしき妹が名の豊旗雲と
誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺やの日は
入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたすまひ物ほしに
のりてつくづくと見つ

ひと國をはるかに遠き天ぐもの氷雲ひのほどり
行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲戀ひしもろこしの君は
昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しろがねと笹べり赫く
渡津見の雲

7 菊しほ

明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り菊しほに黄ばめる小
田を馬が来る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒
に入りけり

ふゆの目のうすらに照れば並み竹は寒ざむと
して霜しづくすも

窓の外さに月照りしかば竹の葉のさやのふる舞
あらはれにけり

しもの夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が
奥おくに朱あかの月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清搔すがにしも引

くべかりけり

欲ほりしてをらむ 月あかきもみづる山に小猿ども天つ領巾ひなど

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがた
をわがかへるなり

8 留守居

明治四十年作

まもりゐの縁の入り日に飛びきたり繩が手を
もむに笑ひけるかも

一人して留守居さみしら青光る蠅のあゆみを
おもひ無なに見し

留守をもちるわれの机にえ少女をこめのえ少年をこの蠅が
ゑらぎ舞ふかも

秋の日の壘の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ
留守すも

入り日さすあかり障子はばら色にうすら匂ひ
て蠅一つとぶ

事なくて見ゆる障子に赤とんぼかうべ動かす
羽さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉は行
きて何も来ぬかも

留守もりて入り日紅けれ紙ふくる猫に冠せん
とおもほえなくに

9 新年の歌

明治四十一年作

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に
茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて
天新たなり

東海に礮馭盧生れていく繼ぎの眞日美はしく
天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて來ら
しも年の若子は

年ののはの眞目のうるはしくれなるを高きの上
り目蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現し
もろもろ

天明り年のきたるとくだかけの長鳴鳥がみな
鳴けるかも

しだり尾のかけの雄鳥が鳴く聲の野に遠音し
て年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守らへる大和島根に
春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと
年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して
見まくたぬしも

打日さす大城の森のこ緑のいや時じくに年ほ
ぐらしも

豊酒の屠蘇に吾るへば鬼子ども皆死ににけり
赤き青きも

くれなるの梅はよろしも新^{あらた}たまの年の端に見
れば特^{とく}によろしも

10 雑歌

明治四十一年作

あかどきの畑の土のうるほひに散れる桐の花
ふみて來にけり

青桐のしみの廣葉の葉かげよりゆふべの色は
ひろごりにけり

ひむがしのごもしび二つこの宵も相寄らなく
てふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春はさり山焼くる
かも天の足り夜を

ひさ方の天の赤瓊のほひなし遙けきかもよ
山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の疊に
蟻を見しかな

眞夏日の雲の峯天のひと方に夕退きにつつか
がやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中
の寂しさ思ふ

秋の夜を灯ともししづかに揺るる時しみじみわれは
耳かきにけり

ほそほそと蟲啼きたれば壁にもたれ膝に手を
組む秋のよるかも

旅ゆくさ井いに下り立ちて冷々ひやひやに口そそぐべの
月見ぐさのはな

11 鹽原行

明治四十一年作

晴れ透とほるあめ路ぢの果てに赤城根あかぎねの秋の色はも
更け渡りけり

小筑波つくはを朝を見しかば白雲の凝れるかかむり
動くともせず

關屋^{せきや}いでて坂路^{さかぢ}になればちらりほらり染めた
る木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて
尾を振るが見ゆ

山角^{やまかど}にかへり見すれば歩み來し街道筋^{かどぢ}は細り
てはるけし

馬車とごろ角^{かく}を吹き吹き鹽はらのもみづる山
に分け入りにけり

山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼^{せま}り來^く
わがまなかひに

とうとうと喇叭を吹けば鹽はらの深染^{こぞめ}の山に
馬車入りにけり

つぬさはふ岩間を垂るるいは水のさむざむと
して土わけ行くも

湯のやごのよるのねむりはもみち葉の夢など
見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水に
おもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音の近くに
止みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿の女が起きねとい
へど起きがてぬかも

世のしほと言のたふとき名に負へる鹽はらの
山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに
山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染みし紅葉を
踏みつつぞ行く

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに
水たぎち見ゆ

かへりみる谷の紅葉の明らけく天に響かふ山
がはの鳴り

現し我が戀心なす水の鳴りもみちの中に籠り
て鳴るも

山川のたぎちのごよみ耳底にかそけくなりて
峯を越えつも

ふみて入るもみちが奥は横はる朽ち木の下を
水ゆく音す

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり
音とどろくも

うつそみは常なけれごも山川に映ゆる紅葉を
うれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親しみて鳴
く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木の黄にもみち明るき峽に
道入りにけり

もみち原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこのさみしみに
堪へて鳴くなり

つかれより美しくしいめに入る如き思ひぞ吾が
する蟋蟀のこゑ

もみち照りあかるき中に我が心空しくなりて
しまし居りけり

しほ原の湯の出でごころとめ來ればもみちの
赤き處なりけり

山の湯のみなもごころ鐵色かねいろにさびさびにけ
り草もおひなく

鐵かねさびし湯の源のさ流れに蟹が幾つも死にて
るたりも

親馬にあまえつつ來る子馬にし心動きて過ぎ
がてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠くれなるに
夕焼くる見ゆ

橋のべのちひさ楓かへるでかへり路になかくれなるを
染めて居りけり

天地のなしのまにまに寄り合へる貝の石あは
れとことばにして

ほり出すいはほのひまの貝の石ただ珍らしみ
ありがてぬかも

玉ゆらのうれしごころもどはの世へ消えなく
行かむはかなむ勿れ

おくやまの深き岩間ゆ海つもの石と成り出づ
君に戀ふるとき

もみぢ葉の過ぎしを思ひ繁き世に觸りつるな
べに悲しみにけり

山峽のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか
峽のもみぢに

もみぢ斑の山の眞洞に雲おり來雲はをこめの
領巾漏らし來も

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りて
もみぢをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の國さび
月かたむきぬ

まぼろしにもの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に
月満てりけり

12 折に觸れて

明治四十二年作

潮沫しほのはかなくあらばもろ共にいづべの方に
ほろひてゆかむ

やうらくの珠はかなしと歎なげかひし女をんなのころ
うつらさびしも

宵よひあさくひさり居りけりみづひかり蛙かはづひとつ
かいかいと鳴くも

をさな妻つまころに守り更けしづむ灯火ともしびの蟲を
殺してゐたり

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き
居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影も
さゆらぎて居り

春闌けし山峽の湯にしづ籠り楸の芽食しつ
ひさを思はず

馬に乗り湯ごころ來つつ白梅のごとのふ春に
あひにけるかも

ひとり居て卵うでつたぎる湯にうごく卵を
見つつうれしも

干柿を弟の子に呉れ居れば淡々と思ひいづる
ことあり

ゆふぐれのほごる雪路をかうべ垂れ濕れたる
靴をはきて行くかも

世のなかの憂^{うれ}苦も知らぬ女^めわらはの泣くこと
はあり涙ながして

春の風ほがらに吹けばひさかたの天^{あめ}の高低^{たかひく}に
風が浮べり

萱^{くわん}ざうの小さき萌^{もえ}を見てをれば胸のあたりが
うれしくなりぬ

青山の町かげの田の畔みちをそぞろに來つれ
春あさみかも

春あさき小田の朝道あかあかど金^{かな}氣^け浮く水に
かぎろひのたつ

明けがたに近き夜さまのおのづから我心にし
觸るらく思ほゆ

天竺のほとけの世より子らが笑にくからなく
て君も笑むかな

さみだれはきのふより降り行々子をほのぼの
やさしく聞く今宵かも

八百會のうしほ遠鳴るひむがしのわたつ天明
雲くだるなり

13 細り身

明治四十二年作

重かりし熱の病のかくのごと癒えにけるかと
かひな撫るも

蛸のかなかなかなと鳴きゆけば吾のこころの
ほそりたりけれ

あな甘、粥強飯を食すなべに細りし息の太り
ゆくかも

まこそわれ癒えぬともへば群ぎものこころの
奥がに悲しみ湧くも

やまひ去り嬉しみ居ればほのぼのに心ぐけく
もなりて来るかも

たまたまの現しき時はわが命生きたかりしか
このうつし世に

病みぬればほのぼのとしてあり經たる和世の
すがた悲しみにけり

いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶごも
ひと云ふらむか

しまし間も今の悶えの酒狂まがになるを得ばかも
嬉しかるべし

閉づる目ゆ熱き涙のはふり落ちはふり落ちつ
つあきらめ兼ねつ

やみ恍まぼろしけおそろへにたれさ庭べに夕雨ふれば
嬉しくきこゆ

みちのくに我稚くて熱を病みしその日仄かに
あらはれにけり

おそろへし胸に眞手まておく若き子にあはれなる
かも鯛きこゆ

熱落ちておそろへ出で來もこのごろの日八日ひや
夜八夜は現しからなく

恣にやせ頬にのびし硬ひげを手ぐさにしつつか
 さ夜ふけにけり

うそ寒くおぼえ目ざめし室の外は月清く照り
 鶏なくきこゆ

ぬば玉のふくる夜床に目ざむればをなご狂の
 歌ふがきこゆ

かうべ上げ見ればさ庭の椎の木の間おほき月
 入るよるは静かに

目を繼ぎて現身さぶれ蟬の聲も清しくなりて
 人うつくしも

現身ははかなれども現し身になるが嬉しく
 嬉しかりけり

おのが身し愛しげればかほそ身をあはれがり
つゝ飯食しにけり

火鉢べにほほ笑ひつつ花火する子供と居れば
われもうれしも

病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火を
して呉れにけり

わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしなど
いひ花火して居り

平凡に堪へがたき性の童幼ども花火に飽きて
みな去りにけり

なに故に花は散りぬる理法と人はいふとも悲
しくおもほゆ

とめごなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけ
なく蟋蟀鳴くも

宵淺き庭を歩めばあゆみ路のみぎりひだりに
蟋蟀なくも

宵毎に土にうまれし蟋蟀のまだいとけなく啼
きて悲しも

さ庭べに何の蟲ぞも鉦うちて乞ひのむがごと
ほそほそと鳴くも

玉ゆらにほの觸れにけれ延ふ鳶の別れて遠し
かなし子等はも

いつくしく瞬きひかる七星の高天の戸にちか
づきにけり

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを
 蟲鳴きにけり

うらがれにしづむ花野の際涯よりとほくゆく
 らむ霜夜こほろぎ

よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子
 らは死にて行くらむ

14分病室

明治四十二年作

この度は死ぬかも知れずと思ひし玉ゆら氷枕
 の氷は解け居たりけり

隣室に人は死ねどもひたぶるに帯ぐさの實食
 ひたかりけり

熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ご物事を思へり

のび上り見れば霜しもつき月の月照りて一本いっほん松まつのあた
まのみ見ゆ

赤光 をはり

赤光目次

大正二年

1	悲報來(十首).....	三
2	屋上の石(八首).....	四
3	七月廿三日(五首).....	六
4	麥奴(十六首).....	三
5	みなづき嵐(十四首).....	六
6	死にたまふ母(五十九首).....	三三

大正元年。 明治四十五年

7	おひる(四十四首).....	四
8	きさらぎの日(十一首).....	六〇
9	口ぶえ(五首).....	六四
10	神田の火事(五首).....	六六
11	女學院門前(五首).....	六六
12	吳竹の根岸の里(十一首).....	七〇
13	さんげの心(十七首).....	七四
14	墓前(二首).....	八〇
1	雪ふる日(八首).....	八三

2	宮益坂(八首).....	八六
3	折に觸れて(八首).....	九〇
4	青山鐵砲山(八首).....	九三
5	ひみりの道(十四首).....	九五
6	葬り火(二十首).....	一〇〇
7	冬來(十四首).....	一〇七
8	柿の村人へ(十首).....	一一三
9	郊外の半日(十七首).....	一二八
10	海邊にて(二十三首).....	一三三
11	狂人守(八首).....	一四〇

12	土屋文明へ(八首).....	一三三
13	夏の夜空(八首).....	一三六
14	折折の歌(二十六首).....	一三九
15	さみだれ(八首).....	一四八
16	兩國(八首).....	一五一
17	犬の長鳴(八首).....	一五四
18	木こり(十七首).....	一五七
19	木の實(八首).....	一六三
20	睦岡山中(十一首).....	一六六
21	或る夜(八首).....	一七〇

明治四十四年

1	此の日頃(八首).....	一七五
2	おくに(十七首).....	一七八
3	うつし身(十七首).....	一八四
4	うめの雨(廿首).....	一九〇
5	藏王山(八首).....	一九七
6	秋の夜こる(廿首).....	二〇〇
7	折に觸れて(廿首).....	二〇七

明治四十三年

1	田螺と彗星(十一首).....	二二七
---	-----------------	-----

2 南蠻男(十一首)……………三三
 3 なさな妻(十四首)……………三五
 4 悼堀内卓(七首)……………三〇

自明治三十八年至明治四十二年

1 折に觸れ(十七首)……………三五
 2 地獄極樂圖(十一首)……………三四
 3 螢(五首)……………三五
 4 折に觸れ(二十首)……………三四
 5 蟲(八首)……………三四
 6 雲(十四首)……………三五

7 菊しほ(八首)……………三六
 8 留守居(八首)……………三五
 9 新年の歌(十四首)……………三六
 10 雑歌(十一首)……………三七
 11 鹽原行(四十四首)……………三七
 12 折に觸れて(二十首)……………三九
 13 細り身(三十五首)……………三九
 14 分病室(五首)……………三一

挿 畫

蜜柑の收穫……………木下 奎 太郎氏
彫 刻……………伊 上 凡 骨氏
通草のはな……………平 福 百 穂氏
三色版……………田 中 製 版 所
佛 頭……………木 下 奎 太 郎 氏

卷 末 に

○明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首を以て此一卷を編んだ。偶然にも伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割番に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ様な随分ひどい作迄も輯録して往年の記念にしようとした。特に近ごろの予の作が先生から賞められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雑誌に發表せず此歌集に收めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日、この歌集の編輯がやうやく大正二年度が終つたばかりの頃に、突如として先生に死なれて仕舞つた。

それ以來氣が落つかず、清書するさへ臆劫になつた。後半の順序の統一しないのは其爲めである。最初の心と今の心と何といふ相違であらう。それでもごうにか歌集は出来上がった。悲しくも予は此一卷を先生の靈前にささげねばならぬ。

○平福百穂、木下杢太郎の二氏が特に本書のために繪を賜はつた事は予のこよなき光榮である。そのうち杢太郎氏の佛頭圖は明治四十三年十月三田文學に出た時分から密かに心に思つて居たものである。このたび予の心願かなつて到々予のものになつたのである。また、本書發行に就いて予を勵まし便利を賜はつた長塚節、島木赤彦、中村憲吉、蕨桐軒、古泉千樫の諸氏並びに信濃諸同人に對し、又「ごうごうと喇叭を吹けば」の句を賜はつた清水謙一郎氏に對し深く感謝の念をささぐ。

○文法の誤の數ヶ所あること。送假名法の一定せざること。漢字使用法の曖昧

なること等は、臆劫な爲めにその儘にして置いた。本書の作物は今ごろ發行して讀んで頂くのには誠に工合の悪いのが多い。きまりの悪いのが多い。併し同じく讀んで頂く以上は自分に比較的親しいのを讀んで頂かうと思つて、新しい方を先にした。初まりの方を一寸讀んで頂くといふ心持である。本書は予のはじめての歌集である。世の先輩諸氏からいろいろ教へて頂いて、もつこ勉強したい。

○本書の「赤光」といふ名は佛説阿彌陀經から採つたのである、書く迄もなく彼經には「池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤光白光白光微妙香潔」といふ甚だ音調の佳い所がある。予が未だ童子の時分に遊び仲間には難法師が居て切りに御經を暗誦して居た。梅の實をひろふにも水を浴びるにも「しゃくしき、しゃくくわう、びやくしき、びやくくわう」と誦して居た。「しゃくくわう」とは「赤い光」の事であること知つたのは東京に来てから、多分開成中學の二年ぐら

るの時、淺草に行つて新刻訓點淨土三部妙典といふ赤い表紙の本を買つた時分のころである。そのとき非常に嬉しかつた記憶して居る。本書に赤い衣を着せたのも其が關係がある。その頃は丁度露伴の「日輪すてに赤し」の句を發見した時分である。考へて見るに丁度春機發動期に入つたころである。それから繰つて見るに明治三十八年は予の廿五歳のときである。

大正二年九月二十四日よりしるす。



MCMXIII

大正二年十月十日印刷
大正二年十月十五日發行

正價金九十錢

著者 齋藤茂吉

東京市日本橋區檜物町九番地

發行者 西村寅次郎

東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地

印刷者 佐藤保太郎

發行所

東京市日本橋區
檜物町九番地

東雲堂書店

電話本局一八七一番
振替東京五六一四番

版權所有

